

2024年度 第1回森と水の源流館 授業づくりセミナー 概要報告

奈良教育大学 中澤 静男

- ◇開催日時 2024年7月06日(土) 10時～12時
- ◇開催方法 ZOOMによるオンラインセミナー
- ◇参加者 新宮(奈良女子高等学校)、加藤(川上村水源地課)、原孝博(奈良学園)、島俊彦(福岡市立七隈小)、
森と水の源流館:尾上・古山・成瀬・上西・高田・木村
奈良教育大学:大西・中澤、学生

◇内容

1. 源流館の紹介

【尾上事務局長】

- ・川上村は広いが、その95%は山林が占めている
- ・「地域資源の教材化」にこだわって進めている。テーマは「水の恵み」
- ・川上村は紀ノ川、吉野川の源流域にあたる。
- ・大滝ダム(発電)と大迫ダム(農業用水)の2つのダムがある。そして3つ目のダムが、自然のダム 水源地の森 吉野林業が始まった地域
- ・土倉庄三郎—吉野林業
- ・川上宣言(水源地の村づくり)1996年～
- ・現実的な問題 バーベキューにとまなうゴミの散乱
- ・発問を重視した展示 「ありがとう」って、だれからだれに伝える言葉? 「おかげ」私にできることって何だろう?

【高田次長】

- ・源流館スタッフが行っている様々な調査を村の行政に生かし、地域創生につなげたい。そして、「暮らしの質の向上」に貢献できないかと考えている。

【上西さん】

- ・民俗分野の調査を担当
- ・木と水と人の共生
- ・8月24日にトヨタソーシャルフェスを開催する「大切な源流を未来へつなごう！」

【成瀬さん】

- ・「源流の社:丹生川上神社上社」の発掘調査に参加して以来、川上村に関わる
- ・ものを拾ってくることや城歩きが趣味・なわばり図などを作成している
- ・古い絵ハガキを集めるのも趣味で、県立図書館に寄贈している

【木村さん】

- ・コケが専門
- ・コケは大気汚染の指標として授業でも生かすことができる
- ・フィールドワーク・過疎問題、顕微鏡の使用などアドバイスできる。

【古山さん】

- ・昆虫が専門
- ・昆虫は環境そのものである。昆虫の状況を把握することが地域の自然環境を把握することになる

- ・昆虫から生活環境の変化を把握できる。

2. 「ESDの授業をつくる」(中澤静男)

(1) ESDではどのような児童生徒の育成を目指すのか。

「ヒト・モノ・コトにCAREできる児童生徒の育成」

ヒトに対する CARE：すべての人に親切にする、元気のない友達に声をかける、いじめられている
友達の味方になる

モノに対する CARE：モノを大切に修理しながら長く使う。リユース、リサイクル

コトに対する CARE：お祭りを受け継ぐ。お祭りを見に行く。

CARE できる人には、様々な場面で適切な行動や言動を期待できる。では、そのような人々の行動の
変革を促すには、どうすればいいのか？

「それは、個人的な信念、洞察、あるいは何が正しいかという単なる感覚から生じることが最も多い。」

(「ユネスコ持続可能な開発のための教育ロードマップ」P. 57)

(2) 教材開発・授業実践

- ・自然環境や生態系の保全を重要視できる価値観

→ 生き物探し、海ごみ、気候変動、水の恵み、 など、児童生徒にとって身近な素材の教材化

- ・人権・文化を尊重できる価値観

→ 横の異文化：食文化、宗教、民族衣装(服装)、トイレ

縦の異文化：生活習慣の移り変わり、歴史文化遺産、お祭りなど、身近な素材の教材化

- ・幸せの四葉のクローバーを意識した学級経営・子どもとの接し方、声のかけ方

①「やってみよう！」因子(自己実現と成長の因子)

②「ありがとう！」因子(つながりと感謝の因子)

③「なんとかなる！」因子(前向きと楽観の因子)

④「あなたらしく！」因子(独立とマイペースの因子：自分を人と比較しない)

(出典：『幸せのメカニズム』前野隆司、講談社、2013年)

(3) 教材研究

①文献調査：地域のことを知るためには『〇〇史』は必読

②現地調査：足を運んで五感で感じとる

(本・教科書に書かれていることと変わってしまっていることが多々ある)

③インタビュー調査：変化には人の影響が大きい、それを聞き取る。複数人から聞き取ることで、
教材にふさわしいかどうかを判断する。

(4) 単元をデザインする

①中心発問：それを追究することで単元の目標に迫ることができる発問

②深める発問：児童・生徒の「わかったつもり」を揺さぶる発問

③発展させる発問：自らの行動の変革を促す発問、次の学習意欲を高める発問

(5) 評価について「自己評価力(メタ認知)を高める」

①単元前のアンケートと単元後のアンケートを比べさせる

②学習ノートに考察・感想を書かせ、4つ葉のクローバーのコメントを記載する。

③単元終了後に作文(レポート)を書かせ、児童・生徒による相互検討を促す。